
わんわんお！

スタジオぽこたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わんわんお！

【Nコード】

N8324X

【作者名】

スタジオぼこたん

【あらすじ】

レキィサ・ダブルファング。双牙の称号を持つ少年は、とある使命を帯びて、とある都市を訪れていた。そこはかつてイリスの聖地と呼ばれ500年前の神魔戦争では決戦地として使用された場所。現在は人類の希望の星『アルビレオ』と呼ばれていた。少年はその都市で一人の少女と出会う。これは一つの約束と500年越しの思い。そして騎士道に殉ずる乙女達の物語。

序章

樹齡千年を超える大樹がひしめく暗い森の中を、一人の少年が走る。

呼吸は乱れ、全身にひどい汗をかいていた。

心臓は高鳴り、喉は渴き、指先は震えた。

それは絶望的な死だった。

木々の間を縫うように走り、走り、走り

「ッ！！」

少年が咄嗟に頭を下げた。さっきまで頭をあつた空間を鋭い牙が喰らいつく。歯と歯が噛み合わさるにしては、ゾツとするような金属音を響かせ、周囲には火花が散った。

少年に噛み付こうとしたのは、見上げるほどに巨大な狼だった。

暗い森の中なのに、その漆黒の毛並みは、まるで光を発しているかのように、絶大な存在感を放っていた。

巨大な四肢に、巨大な胴、鋭い牙が並ぶ大きな口は、少年の体を一飲みに来るそうなほどであった。

「くッ」

紙一重で死を避けた少年は、避けた動作の反動で危うく転びそうになったが、その流れに逆らわず前へと跳んだ。

地面に片手をつきながら前転し、全身でしなやかに衝撃を吸収しながら、再び走り出そうとした。

巨大な狼は、そうはさせじと太い前足で、前方を薙ぎ払う。

少年は向かって左の大樹を強く蹴り、三角跳びの要領で今度は右へと大きく跳んだ。

鋭い爪が少年を掠めながら大樹に激突した。大樹は粉々に爆散し、木片が鋭い矢のように飛び散る。少年は腕で顔を庇いながら、転がるように走る。

先ほどから何度も何度も、後一步の所で獲物を取り逃がしていた狼は、怒りに満ちた咆哮を上げながら少年を追った。

「はあ、はあ、はあ」

少年は大きな獣道を逸れると、細い獣道へと飛び込んだ。

そこは大きな大樹に挟まれた非常に小さな獣道で、あきらかに巨狼が通れるサイズでは無かった。

だが、怒りに狂った巨狼は、立ち塞がる木々の全てを薙ぎ払い、少年を追いかける。

少年は腰に大型のナイフを帯びていた。

だが今のこの状況では、天地がひっくり返っても、この狼には勝てはしない。少年はそれを良く理解していたし、狼もそれを良く理解していた。

この『太古の森』と呼ばれる場所では、人間は捕食される側なのだ。

少年は走る。

やがて、開けた広い空間に出た。

巨大な大樹で囲まれ深い海の底のように日の光が届かない暗闇の森で、そこだけは優しい日の光が差していた。

美しい花が咲き乱れる花畑。まるで場違いな光景。

だがそこは、逃げ場の無い袋小路、逃避行の終わり、袋の鼠であった。

濃厚な死の気配、獰猛な獣の息遣いが、すぐ背後にまで迫って

序章（後書き）

はじめましての人は、はじめまして。お久しぶりの人は、お久しぶりです。
スタジオぽこたんです。

1 節

1

出会いはいつも唐突だ。

夜の闇を切り裂くように刃がきらめく。それは目にも留まらぬ早業だった。

冷たい刃の感触が己の首筋に存在するのを、少年は文字通り肌で感じていた。

少年の名は『レキ』、15歳程度の背丈で、まるで少女のようにあどけない顔立ちに、猫毛ぎみの黒髪。旅人が良く使用するこげ茶色の外套に黒いブーツ。一見すると何処にでも居る冒険者風の格好をした少年は、今まさに生命の危機を迎えていた。

「動かないで下さい。少しでもおかしなマネをすれば首が飛びますよ」

鋭い刃を、レキの首筋に押し付ける女性は、殺気に満ちた声ですう言った。

レキはとある都市の、とある暗く薄汚れた裏路地に居た。何故こんな場所に居るのか。は、道に迷ったからである。

既に日が落ち、辺りは真っ暗だ。特に街灯の無い裏路地であるこの場所は、まるで夜の海のように漆黒の闇に包まれている。

だというのに、首筋に当てられた刃だけが、鈍い光を放つ。

「……………」

対する少年レキは、咄嗟の事態に反射的にナイフを抜きかけ動きを止めた。半ば以上まで鞘から抜かれたナイフを持つ少年の手には、じつとりと汗が滲む。それはまぎれも無い『恐怖』あと数ミリでもナイフを引き抜けば、即座に死ぬ。その確信にレキの体は麻痺したように動けなくなる。胸の鼓動が高まり、息が苦しい。な

のに

「武器を捨てなさい」

それは、透き通った天使のような美声。呼吸すら躊躇われる緊迫した状況だというのに、レキはその声に聞き惚れていた。

そして胸の鼓動が、恐怖によるものでは無い事に戸惑う。

「……警告はこれで最後です。武器を捨てなさい」

首筋に押し当てられた刃に力が籠められた。首筋に鋭い痛みが走り、ほんの少し血が溢れる。流れ出た血は、首先に押し当てられた刃に赤いラインを描きながら地面へと落下し、地面へ鮮やかな血痕を刻む。

「……………」

レキはナイフを完全に引き抜くと、ゆっくりと手を開いた。物理法則に従い甲高い金属音を響かせて、地面へと突き刺さるナイフ。

武器を捨てた事で、女性が小さく息を吐いた。ただのそれだけなのに、レキの心臓は五月蠅い位に鼓動した。

「私の質問に素直に答えれば、これ以上の危害は加えません。誰に

……………雇われましたか？」

「や、雇われた……………」

「……………惚けても無駄です。たいした手並みでしたが……………爪が甘いようですね？」

「えっと……………ボクはただ、道を尋ねようと声をかけたただけなんだから……………」

レキは、乾く喉に無理やり唾を飲み込むと、何とか言葉を紡いだ。

「……………」

気まずい沈黙が辺りを支配する。

「ほ、本当ですか？ ウソを付くと為になりませんか？」

「嘘じゃない、本当だよ！」

「では、貴方は何者です？ この私の背後をいとも容易く取るなん

て、普通じゃありえま」

その瞬間、

女性が言葉をつむぐよりも早く、レキは腰に手を回すともう一本のナイフを引き抜いた。

少年の突然の凶行に女性は冷静に刃を、手に持つ『槍』を振るう。レキは構わずにナイフを投擲した。それは目にも留まらぬ早業だった。

レキが投擲したナイフは、女性を僅かに掠めると、そのまま裏路地の奥へと消え去る。

掠めたナイフによって切断された女性の数本の髪が、暗闇の中に黄金色の粒子を放ちながら宙を舞う。そんな光の粒子を切り裂くように、大上段から振り下ろされたのは、女性が振るった槍の一撃。容赦も呵責も無い、神の鉄槌が如き一撃は、尋常ならざる風の塊となり、轟音と共にその場に居る『者』全てを薙ぎ払った。

たった一人を除いて

「手荒な真似をした事、まずお詫びします。私の早合点でした。どうかお許してください」

まるで爆心地のような惨状。その中心に立つ女性は、自らの腕の中に一人の少年を、レキを抱きかかえていた。

長大で重量級の槍を片手でささえる女性はレキを守るように、油断無く槍を構える。

そして、

「闇に潜み人命を狙う悪しき者よ。最早お前が敵う相手では無いと知りなさい。それでも尚、黒き刃を振るうのならば、戦乙女の名にかけて 覆滅します」

それは、とても静かな声だった。

だが、その声に秘められたるは絶大なる殺気。大気が震えるほどの圧倒的な殺しの圧力を受けた影に潜む者は、何も語らずただ静かにその場から姿を消そうとした。

「待ちなさい。それは……返してもらいましょう」

影に潜む者は、気配を消すその刹那、殺気を籠めて何かを放つ。それはレキが投擲したあのナイフだった。暗闇の中を高速で飛来したナイフを、女性は二本の指で白羽取りしてみせる。恐るべき業の冴えであった。

女性の活躍により、襲撃者は去り、脅威は無くなった。

だがレキは、とんでもない強敵に遭遇していた。首筋に刃を押し付けられてる先ほどよりも、よほど危険なこの状況に、レキは為すべが見つかからない。

少年の眼前、視界の全てを多い尽くすのは、暖かくて、ふわふわして、ムニムニして、指が食い込むほど柔らかくて、手では掴みきれないほど大きくて、とても甘く良い匂いがして、先端が少しコリコリっして、そんな凄まじい『兵器』が左右に合計二門つも備え付けられている。現在レキは、その深き谷間において、挟撃……挟み撃ちという全滅の危険を孕んだ圧倒的窮地に陥っていた。

「むー、むむー！　むー！」

つまり圧倒的肉壁、詳しくは言えないが世界最高峰の『おっぱい』に挟まれた少年は、羞恥と、興奮と、色んな要因が重なり　窒息寸前だった。

重量級の槍を片手でささえる程の膂力で、ムギューと胸の谷間に顔を押し付けられたレキは、溺れる者は藁でも掴むと言わんばかりに、女性の胸を揉みしだき、掻き分けて

「ぷはあ！」

死と隣り合わせの桃源郷から、なんとか生還を果たした。

そして、羞恥と興奮と、己の『身体的』な要因から、逃げるように女性から体を離そうともがく。

だが、

「そ、そんなに……動かないで下さい」

それは、最初と良く似た言葉。

だが耳元で囁かれた女性の声は、最初の殺気だった声とは正反対の、とても可憐で優しい声。同時に女性の声には、確かな熱が籠められていて、見えずともその顔が赤面しているのが想像できた。

「ご、ごめんなさい！」

レキは、つい先ほどまで柔らかな白いお餅を、指で『ぶにぶに』していた。それは谷間から抜け出そうとする脱出行為であったが『ぶにぶに』していた事実は変わらない。それはもう念入りに『ぶにぶに』して、たまに『コリコリ』までしてしまった。

「……………い、いえ……………それよりも」

ふと、首筋に何か柔らかい感触が触れた。それは暗闇の中でもわかるほど、純白のハンカチだった。

血がみるみる染みこんで行き、白い領域が黒く穢されていく。

そういえば、槍に刃先で首を少し切った事を、レキは今更ながらに思い出した。

しかも傷口からは、結構な血が溢れ出ている。

「本当に、んッ……………ごめんなさい……………」

女性は、少しだけ甘い吐息が混じった、妙に色っぽい声を出す。

「う、ううん、気にしないで……………」

だ、だって興奮して、出血量が上がっただけだし。

まさに鼻血と同じであった。

そんなレキの胸中とは裏腹に、気道を押さえない絶妙な力加減で的確な止血をする女性、そのハンカチを持つ女性の手は、今も微かに震えていた。

「あ、あの……………本当に大丈夫だから」

レキは暗がりでも互いに顔も見えない中、目の前の女性を見つめた。暗闇の中、必死で相手の瞳を探る。そして、確かに目が合うのを、視線が絡み合うのを感じた。女性もまた、こちらの瞳を捜していたのだ。

ドクン

それは果たしてどちらの鼓動の音だったのだろうか？

女性の胸に抱かれた状態のレキには、それが判らなかつた。ただハッキリとしているのは、自らの心臓の鼓動が、痛いほどに早くなっている事。それだけは間違いようが無かつた。

これが二人の出会い。

舞台となつたのは、淀んだ空気と、血の匂いが漂う真つ暗な裏路地。道を尋ねようと声をかけたら危うく殺されかけた。

少年の不注意と、少女の勘違いが生んだ、それはある種劇的で、これっぽっちも感動的で無く、ロマンスの欠片も見当たらない出会い。そのはずだつた。

だが二人は、顔も見えないこの状況で、不思議と相手に強く惹かれるものを感じていた。そんな二人を祝福するかのように、分厚い雲の切れ目から、優しい月の光がさした。夜の帳が打ち払われ、二人の姿をくつきりと照らし出す。

2節

2

「えッ」「あッ」

闇が抜われ、二人は初めて互いの顔を確認した。

呼吸は乱れ、全身に汗をかいていた。心臓は高鳴り、喉は渴き、指先は震えた。

それは一目惚れだった。一目見た瞬間から、恋に落ちていた。

それは目を見張るほどの美少女で、歳の頃は16歳程度。手足を覆う白銀の部分甲冑と、青い戦乙女の戦装束が印象的だ。

黄金色に輝く美しい髪に、青い宝石のように綺麗な瞳。美の女神でも嫉妬するほど整った目鼻立ちで、濡れたように艶やかな桃色の唇が、少女の美貌に強烈な色香を加えていた。

そして、視線を下げるとそこに飛び込んできたのは、犯罪的に突き出た大きな胸。年齢には不釣り合いなほど豊かに成長した胸の膨らみは、見事なまでの胸の谷間を作り出し、それが惜しげもなく晒されている。ただ見ているだけなのに、深い谷間に吸い込まれそうな圧倒的な迫力と吸引力を放っていた。

え！？ こ、こんな凄いのをボク……！？

レキは思わず鼻を押さえた。

これ以上は危険だと思い、逃げるように視線を下げる。

だがそこに広がるのは、折れそうに細い腰から連なる魅惑のヒップライン。それを覆うのは驚くほど短い、超ミニ丈のプリーツスカート。見えそうで見えない超ミニスカと艶めかしい太ももで構成された禁断の三角地帯。絶対領域がそこには存在した。

更にふともも自体も一級の工芸品のように見事で、うっとりする

ような脚線美に、しなやかな筋肉、なのに女性的な肉感は一切失われていない。月明かりに照らされて白く輝く美肌がとても扇情的にうつつた。

と、都会って凄いよ！

信じられないほどの美貌と、抜群のプロポーション。そして計り知れない色香を放つ美少女は、こちらの舐め回すような視線を受け、恥ずかしそうに身をくねらせる。太ももは擦りあわせられ、胸は上下左右に揺れうごめいた。その絶大な破壊力に、レキはうめき声を上げる。

「そ、そんなに見つめられると……こ、困ります」
少女は恥らうように目を伏せる。

「ご、ごめんなさい！ ボク」
言葉が続かない。喉がカラカラに渴いていた。
そして、

「あ、あの」
二人同時に口を開き、二人同時に撃沈した。二人揃って真っ赤な顔になる。

だが、何を聞きたいかは不思議と互いに理解出来た。この少女が何を聞きたいのか何故だか理解できた。

「ボ、ボクは……レキって言います」

「わ、私の名は……ニフィルシス。どうかニースとお呼び下さい」
頭の中で何度も少女の名前をリフレインさせる。

「ニース……さん」「レキ……君」
お互いの名前を、噛み締めるように呟き、見つめあう。心臓の音が痛い位に響いてくる。

首筋に当てられた少女の手に、レキはソツと被せるように自らの手を置いた。

「あっ」

ニースが小さな声を上げ、ビクツと体を震わせる。

「もう大丈夫だから、そんな辛そうな顔しないで？」

「いえ……ま、まだ血が完全に止まっていません……」

その声には甘く切ない響きが籠められていた。

傷口を押さえる少女の手は、レキの血で真つ赤に染まっている。

「少し皮が切れただけ、ちよつと大げさに血が出るけど、本当に大丈夫だから」

「で、ですが……」

レキはニースの手を優しく握ると、ゆっくりと傷口から離し、自らの胸に彼女の手を置く。服越しからでも判るほど少年の心臓は力強い鼓動を響かせ、生命力に溢れていた。

「ね、大丈夫でしょ？」

「……レキ……君」

レキの行為に、ニースは頬を赤く染める。

そして二人は、おもむろに血で濡れる指先を絡めあう。それは酷く淫らな行為を連想させた。濃厚な血の匂いの中、出会ったばかりだというのに、二人はまるで恋人のように熱く見つめあう。

ニースの方が背が高く、レキは熱いまなざしで少女を見上げた。

そんな視線を受た少女は、艶やかな桃色の唇から、何かを期待するかのよう甘い吐息が漏した。

「ニ、ニースさん……？」

少女の驚くほど甘い雰囲気、レキは息を飲んだ。少女はまるで発情期の雌犬のような有様に見えた。

レキは、女性経験が皆無で、異性に興味を持ったのも今回が初めてだ。

だが、少年の身に眠る戦いの『才能』は、一匹の雄としての秘めたる『力』は、まさに今この瞬間『目』を覚ました。

「レ、レキ君……？」

ニースもまた、生まれて初めて意識した異性に、胸のときめきを感じていた。

さらに眼つきの変わった少年に身の危険を覚えたが、体は甘く疼くばかりで一向に動こうとしない。

「……ボク、困ってるんです！」

剣士の中でも、短剣の類を愛用するナイフ使いであるレキは、基本的に無駄な攻撃はしない。

『殺す』と決めた時は、いつも必ず一撃で仕留めた。急所一撃、一撃必殺、まさにイチコロであった。

レキは、庇護欲をくすぐる愛らしいプリティーフフェイスに潤んだ瞳という『刃』で武装し、上目遣いでリースを見上げ、

「今日……泊まる所が無いんです」

甘い声で囁くようにそう言った。

それは本当に宿に困っての発言だったが、少年の目覚めた才能がそれを鋭く尖ったナイフに変えた。

「……つつつ！?!？」

母性本能に突き刺さるようなその一撃に、二ースの顔が真っ赤に染まる。

戦う術しか、殺す技しか、滅する力しか知らない、人の皮を被った『ひとでなし』は、まるで本当の乙女のようにうるたえた。

『戦乙女』は、若い男女が一つ屋根の下で『夜』を共にする意味を辛うじて察する事が出来た。

それは『契り』という行為で、『結合』という行為で、『雄と雌』という行為であった。

具体的な事は何も知らなかったが、それでも二ースは、それがエッチな事であると知っていた。

だからこそ、

「……へ、変な事しませんか？」

リースは耳まで真っ赤に染めて、恥ずかしそうに言葉を紡ぐ。

「へ、変な事」

知識は知らなくても、目覚めた雄としての本能が、自らの種を後世に残そうとする本能が、レキを不安にさせた。

なんとなく、この少女の巢に帰ったら、自分は酷い事をしてしま
う気がした。

良くは判らないけどそう思ったのだ。

そんな思考を振り払うように、視線を彷徨わせ　大きく突き出
たニースの胸へと行き着く。

レキは思わず喉を盛大に鳴らしてしまう。

し、しまった！

そう思い、慌てて目を逸らす。

だが、

時既に遅く。レキの思考の中は『アノ』衝撃的な感触で埋め尽く
される。まさに魔性のおっぱいであった。

「ッ！」

レキのある意味『負』の感情を、雄の視線を敏感に感じ取ったニ
ースは、一瞬驚いた顔をしたものの、色んな感情の入り混じった『
困った』表情を見せる。ただ、困ってはいても、そこには少しの嫌
悪感も存在していない。それどころか少女の瞳は、何かを期待する
ように揺れ動く。

そんな少女の甘い空気を読みきった少年は、ただ一言。

「……ダメ……かな？」

その言葉がトドメとなった。

ニースはもう何も語らず、ただ耳まで真っ赤にしてレキの手を引
いた。レキも黙したまま従う。

互いに顔を赤くし、裏路地を足早に歩む。その先に待つものを互
いに強く意識しながら

その時、異変が起きた。

前を歩くニースが、突然苦しそうに胸を押さえ、膝をつく。

「なッ！？　どうかしたの！　大丈夫！？」

「い、いえ！　何でも……何でもありませんッ！　んくう」

ニースはそう言うが、どうみても苦しそうだ。

だが、

「う、ごめんなさい……わ、私」

ニースは突然立ち上がると、その場で大きく跳躍した。

人とは信じられないほど高く、空に跳んだ少女は、少し離れた建築物の屋上、その縁に降り立つ。

レキは慌てて声をかけようとした。

だが、金色の髪をたなびかせ月を背後に立つその姿は、とても幻想的で、少女の人とは思えないほどの美貌と相まって、まるで月の女神フィンメナの祝福を受けて戦う、戦女神ニースを描いた神話の壁画にそのものに見えた。

夢のようなそんな光景にレキは思わず見惚れ 獲物を捕らえる
絶好のチャンスをふいにした。

ニースは一度だけ、切ない表情でレキを振り返ると、そのまま闇夜に姿を消した。少女が去ったその場には不思議な香りが、まるで絞りたてのミルクのような甘い匂いだけが残った。

3節

3

次の日、とある宿屋の一室にレキは居た。

「もう、レキってば！ いつまで落ち込んでるの!？」

少し拗ねた響きがこもった愛らしい声の主は、少年の肩にちょこんと腰かける小人のように小さな少女だ。

それはアールプと呼ばれる精霊に近い妖精族の一種で、とても希少な存在だ。名前ティンク。レキの相棒を務めている。

光の粒子を放つ水色の髪に、銀色に輝く羽、手の平に収まるほど小さな少女の体には、綺麗な花のような短い丈のワンピース、腰の部分にある大きなリボンが特徴的だ。

「別に落ち込んでなんか……はぁ……」

レキは、盛大にため息を吐く。

現在少年の思考の大部分を占領しているのは、昨晚出会った一人の少女だ。

まさに一目惚れだった。

ニースと名乗った少女の、凄まじい美貌に惹かれたのはあるが、なによりもレキを虜にしたのは少女の持つ計り知れない『力』だ。

もつと彼女と話したい。

だが肝心の少女は、名前以外の何も知らない状態だ。再びあの少女に出会えるのか？ そんな不安がレキの心に影を落とす。

この世は一期一会の出会いというものがある。

どんなに会いたいと思っても、運命の悪戯なのか、決して巡り合えない相手というのが確かに居るのだ。

レキは、チャンスを生かせない者の末路を嫌というほど見てきた。

機会を逸するという事は、機会すら得られない者からしたら、それだけで罪深い行為なのだ。

「はあ……」

「ウソついても私には判るんだからね？ 私がちよくと目を離れたらスグに悪い女に引つかかるんだから！ これだからレキはぶんぶんっ！」

ティンクは、頬を膨らませて怒りを表現する。

怒ってる当人は兎も角として、それはとても愛らしい表情で、レキは思わず和んでしまう。

「なんでティンクってば、そんなに怒ってるの？ ほら、機嫌直してよ」

慣れた手つきで、ティンクの羽を優しく撫でる。

機嫌を損ねた相棒に最も効果的な一手である。

「な！？ べ、別に怒ってなんか！！ ただ母様からレキの事お願いねって頼まれてるからで、貴方の事なんて、なんとも思っていないだから！ か、勘違いしないでよね！」

ティンクは顔を赤くしてそっぽを向く。

そんな相棒に、レキは、

「ちゃんとわかってるって、だってティンクはアールプのお姫様だもんね。ボクだってこれでも感謝してるんだよ？」

レキは、気難しい相棒の、不器用な『慰め』に感謝しつつそう答えた。

肝心な部分を完璧に捉え違えてる少年。チャンスにすら気が付かないという罪深い者がここに居た。

「レキのバカ……鈍感……」

「何か言ったティンク？」

「な、何でも無いわよ！ それよりも早く用事を済ませちゃってよ！ 本当ならこんな人で一杯の街なんて来たくもなかったんだから……」

どうにも不機嫌なティンクに、レキは困った顔になる。

余程『用事』が気に喰わないらしい。

森で静かに暮らす妖精族であるティンクは、森を荒らす人族を快く思っていない。どちらかというと嫌悪感を抱いている。これから長期間、この街で暮らす事になるかと思うと、不機嫌になるのも無理は無いとレキは思った。

「そつだ！　せっかく街に来たんだし、お礼に何かご馳走するよ」
人間嫌いのティンクだが、妖精である生来の気質は変えられないらしく。実はにぎやかな街やお祭りなどが大好きで、甘く美味しいものにも目が無い。

使者としてこの都市を訪れたレキには、重要な使命があるのだが、相棒の機嫌を伺うというのもレキにとっては重要な使命であった。

それに、レキ本人がこの巨大な都市に到着した時点で、使命の内容はほぼ完遂したと言える状態なのだ。

少しくらい寄り道をする余裕はあるとレキは判断した。

「本当ッ!?　で、でも……用事の方は良いの?」

「うん、ティンクには日頃からお世話になってるし、それに『予定』よりも早く来てるから少しくらい観光しても大丈夫だよ」

「やったー！　丁度行きたいお店があるの!」

ティンクは嬉しそうに羽をはためかせる。

なんだかんだ言っても、人族のお店をチェックをしている辺りに、彼女の妖精気質が窺えた。

そして、

「少し待ってて！　すぐ用意するから!」

慌ててバスルームへと飛び込むティンク。

しばらくして

「お待たせ!」

お出かけ準備万端のティンクが現れた。

それは手の平サイズの妖精姿とはまるで別人。アールブが『人』としての形態を取った状態のティンクがそこに居た。

レキは見慣れているのもう慣れたが、ティンクは絶世の美少女なのだ。

綺麗な水色の髪はそのままに、驚くほど長いまつ毛に、愛らしい瞳。誰もが羨む白い陶器のようにきめ細かな素肌。

美形が多い妖精族の中でも、アールブ随一と歌われた最強の美姫がそこには居た。

ティンクの衣装は、一言で例えるなら『花のつぼみ』だ。

春に芽吹いた新芽のように鮮やかな翠色のビスチエ。ハーフカットで切られたブラの部分は、ティンクの控えめなバストサイズを一番効果的に魅せるよう完璧に計算された出来栄え。

総じてスレンダーな体つきの多い妖精族は、逆にそれを最大の武器として魅せる技巧において、他の追隨を許さない。

大胆にお腹部分を露出させ、腰履きで穿かれているのは、同じ翠色のミニ丈のプリーツスカート。スカートの下には白色のパニエ。ふんわりと花のように広がるミニスカートから覗く細く長い脚は、スレンダーながらも女性的な丸みを感じさせる脚線美で、中性的なその肉体に確かな色気を加えていた。

「……どうかな？」

少しだけ頬を赤くして、上目遣いでレキを見つめるティンク。

「良く似合ってるよ。でも……ちょっと露出度が高くない？」

正直レキは目のやり場に困っていた。

幼馴染ともいえる間柄なので、あまり異性として意識しないが、最近のティンクは本当に可愛らしくなったと思う。

昔はただのお転婆姫だったのに……。

レキはそう思った。

「でも……レキってば、こつというのが好きなんでしょ？」

ティンクはそう言って、ミニスカートの裾を掴んで持ち上げて見せた。

ふわっと広がったスカートの奥に、純白の三角地帯が一瞬みえ
「レキのえっち……」

してやったりという顔で、にんまりと笑みを浮かべるティンク。
悪戯好きの妖精の本領発揮であった。

レキはというと、

ポカッ

「い、いった〜い！ 何するのよバカレキ！」

「お姫様なんだから、そういうハシタナイ事しないの！」

「う〜……」

「ほら、バカな事してないで行くよ」

だがしかし、

「ねえレキ……何色だった？」

ティンクはレキの耳元で、ソツと囁くようにそう言った。

レキは反射的に顔を赤くしてしまう。

「あれあれ〜？ レキってば顔赤いよ？ もしかして私のパンツ見
て興奮しちゃったの？ クスクスッ、レキのえっち やっぱりこ
ういうの好きなんだ？」

色っぽい仕草で、両手で太ももの内側に手を当てるティンク。

まるで経験豊富な淑女の様子を見せた。

「……もうボク一人で行くからね」

レキは顔を赤くして、さっさと部屋から出て行ってしまった。

一人部屋に残されたティンクは、

「私だつて……恥ずかしいんだから……レキのバカバカ……」

レキが居なくなると同時に顔を真っ赤に染め、乙女の表情を見せ
る。

「早く治まって……」

胸を押さえながら小さく呟くと、高鳴る鼓動を抑えるために、一度大きく深呼吸する。

そして、

「こら、待ちなさいレキ〜！ ちゃんとおこって貰うんだからね〜
〜！！」

元気な声を響かせてティンクはレキを追った。
僅かに頬の赤みを残したまま

3節(後書き)

加筆修正。

4 節

4

「凄い、すごい！ 見て見てレキ！ こんなにおっきいなんて！」
「す、凄いね……これは……」

ハイテンションではしゃぐティンクと違い、レキは少し引き気味に『それ』を見つめた。

皿の上にそびえ立つ、それはまさに巨塔であった。

それはハニートーストという名のスイーツで、ミルクとバターをたっぷり使って練り上げた焼き立ての食パンまるごとをザックリと切り込みを入れ、そこに甘いハチミツをかける。そして新鮮なミルクで作ったバナライスをダブルで乗っけ、更にも上から生クリームやキャラメルソースをデコレーションした贅沢な一品。

「どうです旅の方、このお店の名物は？」

声をかけてきたのは、この喫茶店の看板娘。何故か『メイド服』に身を包んでいる彼女は、栗色の髪を三つ編みにした活発そうな美少女だ。

非常に短い丈のスカートに、黒いガータベルトがとても色っぽい

「……って、痛いよティンク！」

頬を膨らませえたティンクに、足をぎゅむーと踏まれるレキ。

「デレデレして……レキのえっち……やっぱり好きなんだ」

「……誤解だつてば！」

そうは言ったものの、昨晚ニースと出会ってからというもの、ティンクもそうだが短いスカートをはいた女性に、ついつい目がいつてしまう少年。これは一種のすり込みとも言える現象だ。惚れた相手が持つ性的魅力が、そのまま性的嗜好になるのは、良くある事柄だった。

現に今もレキは、対面に座るティンクの短いプリーツスカート、その暗黒のトライアングに、少しでも気を許せば引き寄せられそうになっていた。

ティンクもまた、たびたび感じるレキの視線を受けて羞恥を感じているが、決して隠そうとはしない。それどころかレキだけに見えやすいように角度を調節していた。

「ふふ、仲が良いんですね。ご注文の紅茶とミルクです。ごゆっくりどうぞ」

先ほどのメイド服の少女が、注文の品をテーブルに並べる。

「……なによそれ？」

ティンクがレキの注文のミルクを指差す。

「なにつて……牛乳だけど？」

「なんで、ジヨッキかって聞いているのよ！ お腹壊しても知らないんだからね？」

「い、良いでしょ別に……ボクだって男の子なんだから、もう少し背が伸びたいお年頃なんだよ」

レキは恥ずかしそうに顔を赤くして、ミルクをゴクゴクと飲む。

「なんだか不純な動機を感じるのは気のせいからしら？」

「そ、それよりも、出来立てなんだから早く食べよ」

その言葉にティンクは「それもそうね」と呟くと、ナイフとフォークで上品にハニートーストを切りわけ口へと運ぶ。

「あ、美味しい レキ、これ凄く美味しい」

「うん、本当に！」

二人は楽しそうに話しながら、ハニートーストという名の牙城を切り崩していった。

「ん〜 もう食べられない〜い」

満面の笑みを浮かべて、背伸びしながら街を歩くティンク。

「もう食べられないって、ボクに分まで食べといて良く言うよ」

後ろを追うように歩くレキは呆れた口調で言った。

「ふっふっくん、レキの物は私の物なんだから、何も問題無いでしょ？」

ティンクはクルツと反転して、後ろで手を組みながら、可憐な笑みを浮かべる。

それは妖精族ならではの動きで、言ってる内容は兎も角、とても綺麗だった。

「それにしても……大きな街ね。少し大きすぎない？ 街を歩くのに注意する事が人とぶつかる事だって……どれだけ居るのよ」

ティンクはあまりに多い人の波に圧倒されていた。彼女の故郷では考えられない事だった。

「そうだね。これほど大きな都市は、他に類を見ないだろうね。でもねティンク……ここは500年前に一度、完全にこの大地から消し飛んだんだよ」

「え？」

「神魔戦争って知ってるでしょ？」

「当たり前でしょ！ 私のお母様の母様が、その戦いを経験してるんだから！」

「その戦争の決戦の地が『ここ』なんだ。かつてイリスの聖地と歌われ、500年前の神魔戦争では『最後の砦』として『終末の魔獣』と戦った英雄達の眠る地なんだ」

レキは目を閉じ、幼い頃から聞かされた英雄譚を思い出す。

「想像も出来ないよね……今じゃ世界経済の中心地になってるんだから……。そだけじゃない、来るときに見た広大な緑林地帯や、大きな湖も、全て人の手で作られたものなんだよ」

「あんな綺麗な森と湖が……？ 人間って……ただ壊すだけじゃ無いんだ……」

ティンクは己の無知を恥じるような顔をした。

こういう所が、彼女の最大の美点だとレキは思っている。そして手のかかる妹を見守るような暖かな目でティンクを優しく見つめた。

すると、

「な、何よその目は！？ レ、レキの癖に生意気よ！」

ティンクは眉毛を吊り上げて怒る。

だがその頬は照れてるのが丸わかりなほど、真っ赤に染まっていた。

「人も、中々捨てたものじゃないでしょ？」

「ふん……だとしても、私が何を嫌おうが勝手でしょ？」

拗ねた顔でそっぽを向く。

「ボクは、ティンクに嫌われたままってのは、ちょっと残念かな」

「な、ななな、な!？」

レキの言葉に、ティンクは顔を真っ赤に染めて後ずさりする。

「どうかしたの？ 顔真っ赤だよ？」

「ッ！ な、何でもないわよ！ ったく……レキつてば、本当はわざとやってない？ それともさっきの仕返しかなにか？」

「む、心外だなあ。こんなにもティンクを心配してるってのに、君はアールプのお姫様で、ゆくゆくは国を動かす存在なんだから、もつと人族とも仲良くしないダメだぞ。まあ……急には難しいだろうからボクで馴れていけばいいよ」

「……こ、この……鈍感……あ、あんな言い方……誤解しちゃうじゃない」

ティンクは赤い顔のまま、拗ねたように唇をとがらせ、小さな声で呟いた。

そして、

「人族は嫌いだけど……レ、レレ、レキは特別なの！」

ティンクは思い切って、自らの思いを口に出した。これが今のティンクに出来る精一杯の告白だった。

だが、

「あ、あれ……レキ？」

さつきまで目の前に居たはずのレキが居ない。

「お〜い！ ティンク！ こっちこっち！」

見ればレキが、露店の前で手を振っていた。

ティンクは、悔しいような、ホッしたような、なんともいえない表情をしたが、すぐにレキの元へかけて行っただ。

それはガラス工芸を販売している露店だった。

巧みな技で作られた装飾品や、調度品、食器類の数々に、レキとティンクは目を輝かせた。

「凄く綺麗……まるで宝石みたい」

「うん、それにこの動物なんて、今にも動き出しそうだよ」

そんな二人に、店の主である老婆が声をかけてきた。

「おや、旅の方かい？ よくぞイリスの聖地へこられたのう、アルビレオはそなた達を歓迎するよ」

「……ねえアルビレオって？」

小声でティンクが言う。

「この街の名前だよ。『希望の星』という願いが籠められるんだ」

「へえ、そうなんだ。素敵な名前ね」

「良かったら何か買ってあげるよ？」

ガラス工芸はアルビレオの名産品で、世界的に高い評価を得ている。

「ほんとー！ 嬉しい！ どれにしようかなあ……」

前かがみで、商品を見つめるティンク。とても真剣な表情だ。

でも、短いスカートはいてるんだから、そんな体勢になったら

み、見えてるよティンクってば……。

レキは、周りからガードするように、ティンクの背後へと立つ。

そして、

「これ！ これにするー！」

ティンクは三日月型のイヤリングを指差した。

「ほっほ……御目が高いねえ、それは……月の女神フィノメナを象徴した『月光のイヤリング』さ」

「月の女神って、神魔戦争で人類に味方した神々の一柱じゃない！」「確か……太陽の女神イリスのお姉さんだよな」

「そうだね。我らが女神。愛と戦いそして創造を司る太陽の女神イリス様の姉君にして、この世界を救った三貴神の石柱さ」

老婆は、年齢の深みを感じさせる声で静かにそう言った。

三貴神、それは神魔戦争の折、滅びかけたこの世界を救うために、一人の聖女の祈りに応じて、女神イリスと共に光臨した神々。

神罰と、調停、そして勝利を司る戦女神ニース。

魔獣の母、獣の王、そして闇を司る混沌の女神アイリ。

破壊と再生、そして生と死を司る月の女神フィノメナ。

その凄まじき力で、英雄たちと共にこの世界を救った三貴神は、現在では女神イリスに並ぶ圧倒的な信仰の対象になっている。

「その坊やは、何か買わないのかい？」

フードを目深にかぶり、表情は見えないが、何かを感じさせる重みを感じた。

そして、ふと目に止まったのは一つのペンダント。

透明色の球体の中に、まるで太陽をつめたかのように金色に輝くペンダント。陽光の反射を受けて一際輝いて見える。

「これを……」

レキは無意識にそれを指差していた。

「ほっほほ……これまた御目が高いねえ……。それはまさに、太陽の女神イリス様、その威光を表現したこの世に二つと無い傑作さ。銘は『太陽神の瞳』だよ」

「お幾らになりますか？」

レキはそう尋ねた。

だが、

「そうさねえ……今はまだ……と言っておこうかね」

「え？」

「差し上げると言っておるのじゃ。なに、心配せんでもガラスで作った安物さ。旅の方への贈り物といった所じゃな。土産物を買ったいは是非ともまた寄っておくれ」

老婆は楽しそうに笑いながらそう言った。

なるほど、そういう意味か。

この老婆は、長年露店をやっている眼力なのか、レキ達がアルビレオを訪れたばかりだと判ったようだ。

そして、用事を済ませて帰る時には、また寄って土産物として沢山買ってこれれば良い。つまり、食べ物を買っている露店が良くやっている味見と同じだ。レキはそう解釈した。

「ありがとうございます。帰りには必ず寄りますから」

「おばあさん、またね！」

「そうかい、そうかい。そりゃ……楽しみにしておるよ」

最後まで老婆の表情は、フードに隠れて見えなかった。

「ふふ、見て見てレキ、似合うかな？」

ガラス工芸の露店から離れたら、さっそくティンクは耳にイヤリングを付けて見せた。

綺麗な光沢を放つそれは、太陽の光を反射して、まるで本物の月光を放つてるようにも見えた。これがガラスで作られたとは信じられない思いだ。

「うん、とても良く似合ってる」

「うふ、ありがとレキ」

ティンクは上機嫌にステップを踏みながら歩く。だが突然立ち止まると、

「な、なによ……これ……」

ティンクの尋常ではない態度にレキは、彼女の駆け寄った。

「どうかしたの!？」

「レ、レキ……これ……魔道具だよ」

ティンクは耳に付けたピアスに、恐る恐る触れた。

「なんだって!？」

「神意の量が凄い上がってるのが判るの……こんなに強力な魔力強化の付加魔術が付けられた魔道具なんて、国宝級だよ!」

「まさか……それじゃこれも」

レキは胸ポケットから、ペンダントを取り出した。

さつきまではガラス球の気配しか感じなかったのに、今手にあるそれからは、まるで太陽のように圧倒的な生命力が溢れている。

「レ、レキ! それ……凄いつてレベルじゃないほどの生命強化の付加魔術が籠められてるよ!」

ティンクはとても優秀な魔術師だ。

彼女がそう断言するならば、間違いは無いだらう。

レキはティンクの手を掴むと、

「おばあさんの所に戻らう」

「う、うん!」

二人は足早に、来た道に戻る。

だが、

「いらつしゃい! いらつしゃい! 何にしますか!」

老婆が居たはずの露店は、全く別のお店に変わっていた。

「あ、あの……さつきまでココでガラス工芸売っていた、おばあさん知りませんか?」

「何言つてんだいお客さん! うちの10年間ここで露天商やってるんだぜ?」

店の主人は、怪訝な顔でそう言うと、訪れた他の客を相手に商売を始めた。

「レキ……探索の魔術にも引つかからないよ!」

「ティンク……気配を巡らせるから……衝撃に備えて」

「わ、わかった」

ティンクは慌ててレキから距離を取る。

レキは右太ももにある短剣を引き抜くと、地面へと突き刺した。

そして、

「きゃ!?!」「な、なんだ!」「ビリッて来た!」「突風でも吹いたのか?」

突然の衝撃に、人で賑わう市場は騒然となった。

こうなると予想していたので緊急時以外は、出来るだけ使いたくない技だが、今はまさにその緊急事態だった。

「どうだった……?」

「ダメ……見つからない。ただ……『この都市』には、もう居ないのだけは確かだよ」

まるで夢のように現実味に欠け、狸や狐に化かされてる思いだったが、二人の手元には国宝級の魔道具だけが確かに残されていた。

「……………」

そして、レキはとある方向をジッと見つめ、頬を赤く染めた。

気配を巡らせた時に、もう一人……別の探し人を見つけてしまった。

そう……見つけてしまったのだ。

「レキ……君?」

市場で賑わう通りのずっと先、人の目では目視出来ないほどの離れた距離、そこにレキの一目惚れの相手が、ニースが居た。

彼女もまた、レキの存在を敏感に感じ取っていた。

運命の歯車がゆっくりと動き出す。

それは誰にも止める事が出来ず。巻き込まれる者は、ただそれが

運命だと思っしかない。

ただ……運命を切り開く者が居るとするならば、それはきっと他人への迷惑なぞ露とも思わぬ馬鹿だけなのだろう。

ここにも一人……そんな馬鹿者が居た。

4節（後書き）

世界観が見えて来たでしょうか？
胸焼けするように甘い物語を予定しております。

5 節

5

レキは走る。

ただひたすらに走る。

上体を出来る限り低く保ちながら、地面と平行になるように大地を蹴る。速度は殺さないまま体の上下振動を抑え、両腕の力を抜く。自然と腕は背後へと流れた。

それは相手からこちらの武器が見えないように、すれ違いざまに即殺せるように、覆って、隠して、闇へと葬る為の歩法。

それこそが少年が出来る最速の歩法。『神行法』と呼ばれる戦闘用移動術。

茶褐色の外套をたなびかせ、人垣かき分け、レキは走って、走って、走って

「突然立ち止まって、どうかしたのかいニース？」

そう言ったのは眉目秀麗な顔立ちの男。最高級の騎士鎧を着こなし、鎧の上からでも判るほど鍛え抜かれた体。腰に差された長剣は、それが飾りではない事を如実に物語っている。

「……………」

男の質問にニースは全く応じず、ただ熱い眼差しであさつての方向を見つめた。

その様子はまるで恋する乙女のそれで、騎士の男は驚いた顔になる。

「いったいどうしたと」

そんな騎士の男の言葉をニースが遮った。

「…………… たった今急用が出来ました。申し訳ありませんが、ここで失

礼します」

言葉こそ丁寧だが、もはや二ースの瞳には、目の前に居るはずの男の姿は欠片ほども映っていない。

今もあさつての方向を熱い眼差して見つめていた。

男も釣られてそちらへと目を向ける。

そして、

「下がりなさい二ース！」

騎士の男はそう叫ぶと、腰の剣を引き抜き、二ースを庇う様に前へと立つ。

男の目に映る物、それはまさに『漆黒の狼』だった。

それは信じられない速度でこちらへと迫る。

「ツツアア！」

刺客だと判断した騎士の男は、裂帛の気合と共に、なぎ払うように剣を振るった。

だが漆黒の狼は驚くべき事に、長剣の『下』をかいくぐりると、前転して一瞬の内に男の懐へと入る。男は自らの間合いをあっさりと破られて蒼然となるが、くぐった修羅場の数が男の体を動かしていた。男は手の中で剣を反転させると、逆手に持ち替え懐に入り込んだ敵を串刺しにする為に振り下ろす。漆黒の狼は右手に持つ短剣を構えるが、男の剣速の方が速い。

男は勝利を確信した。

その瞬間、

焼け付くような鋭い痛みを右腕に感じて、思わず剣を落としてしまふ。

男の剣を持つ右腕、その二の腕部分にナイフが下から突き刺さっていた。

「……見事だ」

右手の短剣は囷で、死角に隠した左手のナイフで利き腕を殺された。

それは一瞬の攻防であったが、勝敗は誰が見ても明白だった。

「それほどの腕を持ちながら……残念でならないよ」

男は自らの命が絶たれる覚悟をした。

だが驚く事に、漆黒の狼は後ろへ飛び退くと何故かニースを守るように刃を構える。

そして、

「レキ君っ……！」

背後からニースに抱きしめられる漆黒の狼　少年という事実には、

男は更に驚く。

恐るべき刺客は、まるで少女のように愛らしい顔の男の子だった。

「レキ君だ。本当にレキ君だった！」

「ちょ、二、ニースさん、まって……今は、むぎゅー」

ニースにギューと抱きしめられ、半ば抱っこされた状態の少年は顔を真っ赤にして叫ぶ。

「レキ君、怪我とかしてませんか？　痛い所とかありませんか？」

「だ、大丈夫です。その、しいていうなら……周りの目が痛いかも

……」

まるで『ぬいぐるみ』のように抱きかかえられた少年に、周囲を歩く人々は生暖かい目を送っている。

「敵では無いのか……？　なににせよ……騒ぎにならずにすんだな」

先ほどの戦いは、あまりに一瞬の出来事で、誰も気が付いていないようだ。

男は剣を回収し鞘へと納めると、真っ赤な顔でデイベア扱いられてる少年と、見た事もないような満面の笑みで少年を抱きしめるニースを眺め、

「……すまないが……どういう事なのか説明してくれるかな？」

酷く痛む腕を止血しながら、疲れたようなため息を吐いた。

「ほお、それでは昨晚ニースを救ってくれた英雄殿とは君の事だったのか？ おっと失礼した。私の名はロンド。ロンド・ザ・アイアンシールド。鉄壁の称号を持つ。盾騎士だ」

盾騎士と聞いてレキは「あれ？」という表情を浮べた。それを見たロンドは、

「今日は非番だね、あいにく盾の持ち合わせがなかったのさ」
片目を閉じてそう言った。

「そうだったんですか……」

「私の本領は『盾』の扱いだからね。良ければ君の名前も教えてはくれないか？」

「あ、ごめんなさい。ボクの名は……えっと……レキ。レキって言います」

「ふむ……」

盾騎士ロンドは、何かを探るような目でレキを見つめたが、ふとニースに目を向けると、

「レキ君の事は判ったが、君達はいつの間になんか仲良くなったんだい？」

ロンドは、含みのある様な笑みでそう言った

「えっと……」

「プライベートな内容は答える義務は無いかい？ でも、私には聞く権利があるのさ。何故なら私は」

「ロンドッ！」

ロンドの意図を察したニースは、顔色を変えて怒鳴る。

だがロンドは彼女を無視して言葉を続ける。

「私はニースの婚約者なのさ」

「え……」

その言葉を聞いた瞬間、レキは頭の中が真っ白になった。遅れて
込上げて来るのは胃がムカムカするような得体の知れない感情。

「ち、違っのレキ君！ ロンド！ 今の言葉……すぐに訂正して下
さい！」

「断ると言ったら？」

「絶対に 許しません」

リースは顔の表情を消すと、槍の先端をロンドへ向ける。

「味方に刃を向けるとはな。騎士にあるまじき行為だぞ……ニース」
「虚偽の罪を犯した同僚を悪の道から救い出すのも騎士の務めです。
それに……騎士道は私と共にあります。どうあるかは私が決めます」
ニースから、湯気が立ち上るように、ゆっくりと殺気があふれ出
ていく。

そこへ、

「ロンドさん……」

割って入ったのはレキだった。

ゆっくりとした歩みで、一歩づつロンドへと歩み寄る。

その時ロンドが感じたのは、『万軍』に囲まれたかのような圧倒
的なプレッシャー、信じられない重圧だった。

それは戦場に立った経験があるからこそ判る感覚。『絶望』とい
う名の生々しい死の感覚だった。

ニースも驚いた顔でレキを見つめる。

「ボクは」

「わ、わかった。もう良いレキ君！」

「いいえ、良くなつて無いです！ 例え貴方がリースの婚約者だと
しても」

「冗談だよレキ君。私が悪かった！ 悪ふざけが過ぎた！ いやあ、
やられた右腕の仕返しのもりだったけど予想以上に二人共初々し

くてねえ、つい調子に乗ってしまったよ。はっはは」
「ロンドの乾いた笑みが虚しく木霊する。」

「……ねえ、ニースさん」

「なんですかレキ君」

「やつちやつても良いのかな？ この人」

「ええ、勿論です」

天使のような笑みを浮べてニースは言った。

「皆して酷い扱いだな。それよりレキ君」

冷や汗を浮べながら、ロンドはレキの名を呼んだ。

「なんです？」

「嫉妬は……最高のスパイスだったろう？」

「っ！」

レキは顔を真っ赤に染めた。

「まったく……レキ君は、見てて飽きないな」

そこにニースが、

「……嫉妬とはなんです？」

可愛らしく首をかしげて言った。

ロンドは「あちゃー」と額に手を当て天を仰ぐ。

「やれやれ、騎士姫殿下にも、いずれ判りますよ。こういうのは百聞は一見に如かずと言いましたね。経験しないと判らんもんです。」

なあ少年」

ロンドは馴れ馴れしくレキの肩に手を回した。

「……し、知りませんよ、もう」

「だってほら、あちらの彼女はレキ君の連れなんだろう？」

ロンドが目線を向けた、その先には

「ニースらあああー！！ れきいいいいー！！」

怒り心頭のティンクが、おっかなびっくり人込みを掻き分けてこちらへと近づいてきていた。

し、しまった。テインクの事すっかり忘れてた。

そんなレキを横目にロンドは、

「あれは……墓守りの一族……となるとやはり……」

何かを確信したような目でレキを見つめた。

彼の手が震えている事に、その場に居る者は誰も気が付かなかった。

5 節（後書き）

こんばんわスタジオぽこたんです。

一人称は、心の心情を描くのが凄い便利でしたが、大勢が動く場面がとても難しかったです。

三人称は、その反対って感じ。

さっそくお気に入り登録や、感想くれた方、ありがとうございます。今度ともよろしくです。

6 節

5

「レキのバカバカバカッ！ あんな人の多い所でレディを放置するなんて信じられない！ 騎士失格！ レキのあんぼんたんッ！」
怒りに高潮した頬に潤んだ瞳。種族的特長であるのがった耳も怒りのためかピンツと上を向き、全身で怒りを表現するティンク。

「ご、ごめんティンク！ 決して忘れて……忘れて えっと……」
「忘れて？」

「忘れてました……ごめんなさい」
しょんぼりして頭を下げるレキ。

そんな少年の腕をティンクはギュッと抱きしめて、
「ダメ、許してあげない……」
泣きそうな声でそう言った。

余ほど寂しかったのか、目尻には涙が浮かんでいる。

「本当にごめんね」
レキはそんなティンクの頭を優しく撫でる。
すると、

「……ちよこばふえ」
「え？」

「ちよこばふえなるものを、食べさせてくれたら……少しだけ許してあげる！」

「さっきあんなに食べたじゃない！」

「お、怒ったらお腹すいたの！」

ティンクは少し頬を赤くしてお腹を押さえた。

「……もう、お腹壊しても知らないよ？」

「レキに半分食べて貰うもん！」

「ええ、ボクまだお腹一杯だよ？」

「ふん、お仕置きなんだから、付き合いなさい」

調子を取り戻したティンクは、レキの腕を掴みながら意地悪な笑みを浮べる。

そんな二人は、仲の良い兄弟にも、親友にも、そして恋人同士にも見えた。

そんな風に戯れる二人を、少し離れて見ていたニースは、

「う〜……」

口を尖らせて、拗ねた表情を見せる。

そんな表情に驚きつつも、何故か嬉しそうな顔をしたロンドが、

「面白くないって顔してるぞニース」

笑いを堪えながらそう言った。

「なんだか……面白くありません……」

これ以上見てるのが辛いという感じに、レキ達から目を逸らすニース。

「やれやれ、百聞は一見に如かずと言っただろう？ まさかこうも

早くに経験する羽目になるとはね。それで……どうする？」

「どう……とは？」

「まさか我らが誉れ高き姫騎士殿が、戦乙女ともあるう者が、指を啜えてただ見ているだけと？」

「で、ですが……今レキ君は会話中です。ここで間に入るのには礼を失するではありませんか？」

一人この場を楽しんでるロンドは、出遅れている戦友に年長者としての確なアドバイスを送る。

「そう難しく考えるものではないよニース。男女の仲というのは、我らが良く知っている戦いとおまる所は同じさ。自らが持ち得る最大戦力で意中の相手を 落とす。そこには順番も礼節も、ましてやルールすら無いのだよ」

ロンドはそう言って、両手の拳を撃ち合わせる。

「な、なるほど……戦いであるのなら」

ニースは、これを仮想戦場における城攻めと仮定した。

目標は……と、とても可愛いあの少年。弱点は……今の所不明。

ただ、数少ない接触から得られた情報を整理するに、どうやら『これ』に過敏に反応していた気がする。

ニースはそう考えながら、自らの胸に手を当てた。あの夜、レキに『もにゅもにゅ』された感触は、今でも鮮明に思い出す事が出来る。なんとなくそれは『えっち』な行為の気がして凄く羞恥を感じる。だが、ロンドの助言には『ルール無用』とある。

つまり、奇襲による目標の即時殲滅が有効……という事ですか。騎士としては正々堂々という矜持ですが、なるほど……確かに戦場で甘い事を言つてられませんね。

奇襲の原則における速度の重要性は、今更語る事は何も無い。

ニースは素早く作戦を纏めると、直ぐに行動を開始した。

その姿は、まさに槍騎士の名に相応しい見事な『槍』の突撃であった。

ぼんよん

その音と感触に、レキの思考は一瞬停止する。

軽い衝撃と共に訪れたのは、表現出来ないくらいに柔らかかな物体。何故こんなにも柔らかいのに重力に逆らって前に突き出てるのだろう？ と混乱した頭で思う。

『槍』という名の肉饅頭を押し付けられた少年は、その感触を鮮明に記憶していた。

「ニ、ニ、ニースさん!？」

見るまでも無く、ニースがレキのもう片方の腕を掴み、その豊満な胸を『ぶにゅ』と押し付けていた。

余程恥ずかしいのか耳まで赤くしているが、掴んだ腕をしっかりと抱きしめ、

「ど、どうです……？ な、何か感じますか……？」

甘く震える声でそう言った。

「……や、柔らかいです」

それしか答えようが無かった。

それは見事な誘惑に、レキは頭がくらくらして来た。

「お、お気に召しましたか？」

「それはもう……よ、よいお手前で……」

「嬉しい……」

花のように恥じらいを見せつつも、攻めの一手を続けるニース。

少女の深い胸の谷間に、レキの腕は『むにゅ』と挟まり、凄い

光景がそこには広がっていた。

そこに、

「ちょ、ちょっと貴女！ 私のレキに、な、なな、何してるのよ！」

啞然としていたテインクが正気に返り、レキの腕を胸の間に挟むといういやらしい行為に耽るニースへ怒鳴る。

そしてレキを奪い返すように抱きしめる腕に力を込めて引っ張る。

「レ、レキ君は、この感触がお気に入りなんです！」

ニースも負けじと胸を押し付ける。

「ま、まっつて二人共！」

片方は、まだ未成熟の青い果実が『こりこり』で、妹みたいに思っていた少女の意外な成長に驚き。

片方は、それはそれは極上の完熟した果実が『ぶるんぶるん』でレキの性欲を痛いくらいに刺激した。

「本当に待つて！ お願ひ！」

レキも男の子である。可愛い顔をしているがれっきとした男の子である。

先ほどから野次馬的見物客達、その中でもうら若き乙女達が、レキの下半身を見て顔を赤く染めていた。
だが、

「レキは黙ってて！」

「ま、負けませんっ！」

レキを間に挟んで勃発した戦争は、もはや誰にも止めようが無かった。

そんな原因の一翼を担った男、ロンドは、

「過ぎたるは及ばざるが如し……同情するよ少年」

楽しそうな笑みを浮べた。

「……ニース様お探ししました。そろそろお時間です」

そう言っただけで現れたのは、女騎士の格好をした一人の女性。朽葉色の髪をポニーテールで纏めた気の強そうなツリ目美人。

ニースに掴まれてるレキを一瞬怪訝な目で見るが、すぐに興味を失ったようにニースへと視線を戻す。

「え、嘘！ もうそんな時間？」

ニースは慌てるが、掴んだ腕は放さない。

「隊長！ 急いでください！」

「す、少し待って！」

ニースは女騎士にそう言うと、レキを熱い眼差しで見つめ、

「……改めて言います。私の名はニース。ニース^{II}ザ・ヴァルキュリアス・オブ・クイーン。戦乙女の第三称号を持つ槍騎士です。この聖地を守る神殿騎士団の中でも疾風騎士団の隊長を務めています」
「……戦場を駆け抜ける一陣の風……万軍^{ヴァイスレギオン}」

それは単機でありながら、万軍に匹敵する圧倒的な戦力。たった一人で戦況を覆す事が出来る決戦兵器。『ひとでなし』の二つ名であつた。

「そう……呼ぶ者もいます」

レキの言葉にニースは顔を伏せる。

そして、

「私が……恐くなりましたか？」

震える声でそう言った。

「えっと、次からニースさんに会いたいと思つたら、何処に行けば会えますか？」

レキは恥ずかしそうに顔を赤くした。

「え？」

「こ、これからも……ニースさんと一緒に居たいって意味ですよ！」

「つつ！？ あ、ありがとうございます！ も、もし……私に用向がある時は、疾風騎士の詰め所に来てくだされば……その、その……」

まるで予想外の答えだと言わんばかりに、ニースは驚き、うるたえ、顔を真っ赤にした。

それは、まぎれも無く初々しい乙女の仕草で、とても『万軍』の二つ名を持つ者には見えなかつた。

「隊長……そろそろ……」

「……わかりました。そ、それではレキ君……その、また……で、いいのかな……？」

信じられないほどの美少女なのに、ためらう様にそう言うと、両手を体の前で組むと、指を落ち着かないように動かす。少女のムチムチプリンとした巨乳が、両腕で挟まれて凄い事になっている。

「必ずまた！ 時間が出来たら必ず尋ねて行くね！」

「はい 心より……お待ちしております」

リースは心底嬉しそうに可憐な笑みを浮かべると、丁寧に、そして優雅にお辞儀してレキ達の前から去っていった。

「あれの相手をしようと思ったら、一国を落とすほどの戦力がいるぞレキ君」

ロンドは去っていくリースの後姿を見ながらそう言った。

「それこそ……望む所です」

対してレキは、なんとも勇ましい返事を返す。

そんなレキにロンドは、

「……戦争をしに来たのかと、聞いても宜しいかな？ レキ君……いや、レキ殿と言ったほうがよろしいか？ それとも 閣下でしょうか？」

とても鋭い目つきで詰問するような厳しい口調で言った。

「レ、レキ……」

ティンクが顔を青くしてレキに抱きつく。

レキはティンクを守るように背後へ下げると、

「戦いに来たつもりはありません。ボクはボクの用事と、後……頼まれごとを果たしに来ただけです。つまり、おつかいですよ」

「その言葉を信用しろと言われるのか黒騎士殿？」

「むむ……随分と詳しいんですね？」

レキは困ったなという顔になる。

「ええ、妹の手伝いを無理やり遣らされていますので、嫌でも覚えてしまうのです。改めて……名をお伺いしてもよろしいですか？」

「うん、別に隠すつもりは無いから言ってもいいんだけど……内緒にしてくれると助かるかな」

レキは何故か頬を赤くして、所在無さげにモジモジと体を動かした。

「この国に害をなさない限り、我が剣に誓って口を噤みましよう」

「は、恥ずかしいから一度しか言わないからね！」

レキは真つ赤な顔で Rond に近寄ると「よいしょ」と背伸びし、彼の耳元で、

「ボクの名は、レキ。レキ＝ザ・ダブルファング。牙の第二称号を持つ黒騎士だよ」

囁くように言った。

「や、やはり！！ 黒き双牙殿でしたか……！ アーリントン王国最強戦力……黒狼騎士団団長にして、黒い死神……もう一人の『万軍』の二つ名を持つ最強の騎士！ 一人の騎士として……お会い出来て光栄です」

畏まって頭を下げようとすする Rond。

だがレキはというと、

「も、もう止めて……ボクのライフはもうゼロだよ……」

両手で恥ずかしそうに顔を覆い隠し、涙声でそう言った。

「レ、レキ殿？」

「むー！ だ、だから言うの嫌だったんだ！ く、く、く、黒い死神とか死ぬほど恥ずかしいんだから二度と言わなでよね！ そ、それや以前はそういうの少し格好良いかなとか思ってた……それっぽい格好をした事もあるけど、もう卒業したの！ 黒歴史なのー！」

レキの悲痛な叫び声がアルビオレの青空に木霊した。

6節（後書き）

レキきゅん可愛いよレキきゅん（*、、）ハアハア
こんばんわスタジオぽこたんです。

ツンデレとデレデレの対決でした。

言い換えると、

ペッターとボインの……………おや、こんな時間に誰か来たよう

少し加筆修正。

1 節

1

「それで……これからどうするおつもりで？」

ロンドの質問にレキは、

「うーん、本当はもう少しこの都市を観光したかったんだけど、騒ぎになるのも困るし。先に用事をすませちゃおっか？」

ティンクに向かってそう言った。

すると彼女は露骨に嫌そうな顔になる。

「ダメだよティンク、お母さんとの約束でしょ？ それにボクがここに居る理由でもあるんだから」

「わかってるわよ……」

意外と素直に返事。だがティンクは胸元で腕を組むと、プイッと顔を背けた。

そして、

「私だつて……負けてられないもん」

それは誰に言った台詞なのかレキには判らなかったが、そこには強い決意が籠められていた。

良くわかんないけど、やる気になってくれたかな。

レキはそんなティンクの様子を見て、満足そうにウンウンと頷いた。

「ボクも居るんだから寂しくないない」

まるで妹をあやすように、頭をよしよしと撫でようとするレキ。

だが、

「こ、子供扱いしないでよ！ バカバカッ！」

いつもは照れながらも喜ぶはずの行為に、ティンクは怒って手を振り払う。

「ティンク？」

レキは驚きつつも、不機嫌の原因が判らずに困る。
そこに、

「話は纏まりましたか？」

Rond が絶妙の間合いで口を挟んできた。

「えっと……そうですね。先にボク達がここに居る用事を果たそう
と思います。案内をお願いできますか Rond さん」

「それは……レキ殿としての、正式なお願いと見てよろしいのです
か？」

Rond の言葉には深い重みがあった。

レキは礼節にのっとり右手を胸に当てる。

「レキィザ・ダブルファンクとしてのお願いです。鉄壁の盾騎士口
ンド」

「 承知しました」

「それじゃ『統合参謀本部』まで案内をお願いします」

それはイリスの軍事を司る心臓部、国防の要。全ての騎士団を束
ねる『頭脳』が存在する場所。

決して外敵の進入を許してはいけない聖域であった。

その事に、 Rond の眉が一瞬ピクリとはねる。

だが彼は、ただ短く、たった一言。

「こちらです」

右手を胸に当て、少しお辞儀をすると、左手を前へ出した。

その姿には騎士としての矜持と、覚悟が垣間見えた。

そこに、

「……待ちなさい、その貴方」

驚くことに、ティンクが Rond を呼び止めた。

「怪我……してるんでしょ？ 出しなさいよ」

「驚いたな判るのかい？ これでも怪我には慣れてるし、動きには
出さないように気をつけていたのだが」

「私を誰だか……知ってるんでしょ？」

拗ねた口調でそう良いながら、チラッとレキを伺うティンク。

レキは黙って頷いた。

「怪我してる人が目の前に居るのが嫌なだけ……親切とかそういうんじゃないから！ いいから早く出して」

「あ、ああ、それではお願いする」

ロンドはそう言うと、レキに刺された二の腕部分を前へと出した。

ティンクはソツと手を掲げると、目を閉じ祈る。それは一瞬の出来事だった。

「もう良いわよ」

「な……」

絶句とはまさにこの事だ。

まるで撫でるかのように手をかざただけで、決して浅いとはいえない傷が一瞬にして癒えている。

恐るべき癒しの奇跡であった。

「百聞は　とはまさにこれだな。見ると聞くでは大違いだ。感謝します姫殿下」

「礼なんていらさないわ」

ティンクは踵を返すと、レキの側へと「あゝ怖かった」と言っレキの腕をギュッと掴んだ。

「うんうん、偉いよティンク！ なでなで」

「だ、だから、子供扱いするなって　ふ、ふにゅ……」

何とか反発しようとするが、撫でられた瞬間、猫のように気持ち良さそうに目を閉じるティンク。

なんとも微笑ましい光景が広がっていた。

だがロンドは、そんな二人を見て内心肝を冷やしていた。

「ティンク＝ザ・フェアリーベル。『妖精の鈴』という希少な称号を持つ、アールブの巫女……」

誰にも聞こえない小さな声でそう呟くロンド。

「最強といわれる黒狼騎士団の戦力と、あの癒しの力が加われば…
…もはや敵う国などあるまい。対抗出来る『存在』があるとするな
らば」

鉄壁の異名を持つ盾騎士は、今日の前にある脅威に対して何か『
対策』を考えずには居られなかった。

『統合参謀本部議長室』

そう書かれた部屋の前にレキ達は居た。

廊下にまで赤い絨毯が敷かれ、眼前の古いながらも高級感と気品
を感じさせる扉からは、強烈な畏怖と敬意を覚えた。

それは500年という長きに渡り、聖地を死守してきたというそ
の実績。その為に流れた騎士達の血の重みであった。

その……はずだった。

「ちゅ、ちゅぱ、れろ、れろ……ちゅ、ちゅうう」

「んーっ！んっ、ふはあ、ま、待って！まっ　んちゅーー

！？」

レキの声は虚しくも彼女の口内へと吸い込まれた。

それは酷くアダルトな大人のキスだった。

少年の穢れをしない唇は、女性の艶やかな唇、そして真っ赤な

舌で蹂躪され、口腹内を甘く吸い上げられ、歯の裏側まで愛撫された。

しかも女性は、成熟した肉体を惜しげもなくレキに押し付けてくる。

突然の行為にレキは為す術が無い。

ティンクは魂が抜けたような表情になっており、ロンドは死んだような顔になっていた。

孤立無援。絶体絶命。

追い詰められたレキは必死の反撃に出た。

必死で舌を絡め、唇を吸い、体に指を這わせた。

だが稚拙な少年の攻撃なぞ、眼前の女性には露ほども効いては居なかった。

「……だが、筋は悪くないぞ少年……これは、ご褒美だ……じゅる

……」

「や、やめて」

悲痛　でも無い叫び声が室内に木霊した。

「はあ、はあ……」

頭の中が明滅するような強烈な快楽を口内から叩きつけられ、レキは思わず膝を着く。

対人戦で、ここまで一方的に勝られたのは初めての経験だった。

少年は悔しげに床を叩く。

「……それはで本題に入りましょうか」

突然の凶行に及んだ女性は、まるで何事も無かったかのように、ずれたメガネを戻し、服の乱れを正した。

ただ、赤いルージユの乱れた後だけが、先ほどの行為の激しさを物語っている。

それは、紫の髪を肩口でバッサリ切ったセミロングで、大人の雰囲気がとても色っぽい美人な軍人さんだった。紺色のフォーマルな

軍服を見事に着こなし、胸元ははち切れんばかりに膨らんでいる。そしてタイトなミニスカートはドキツとするほど短い。黒のガータベルトに、黒のヒール。そして知的な銀縁のメガネが特徴的だ。「あ、ああ、貴女!!! な、なんて事してくれるのよ!!!!!!」

正気に戻ったティンクが火山の噴火の如く怒りの雄たけびを上げる。

「なんて事とは、口付けの事か？ それとも粘膜交換とでも言え方がいいかな？」

女性はいやらしく唇に指を触れた。

「レキは、レキは！ 誰ともキスした事なかったのに!!!!!!」

「おや？ 初物だったのか……それは重畳。安心しろ少年。私も……初めてだ。どうだ？ 結婚でもするか？ 言っておくがこれでも私は尽くすタイプだ」

知的美女のお姉さんは、カツツカツツとヒールの音を鳴らしながら、レキへと近づくと再び唇を

「だめええええ!!!!!!」

ティンクがぬいぐるみを奪い返すように、レキを抱きしめる。

「あ、貴女いい加減にしなさいよ！ な、なにが結婚よ！ 初対面でしょう!?!」

「ふむ、確かにそうだ。だが、この少年は私の好みなんだ。ドストライクと言つて良い。まさにそう……一目惚れだ」

お姉さんは表情を全く変えずにそう言った。

だが、その瞳は危険な色でキラキラと輝いている。

レキは本能的に、貞操の危機を覚えた。

「レキも、レキよ！ あんな女に奪われるなんて！ これならもつと早くに私が」

涙目のティンクは、頬を赤く染めて、

「レキのバカ……ちゅ、ちゅう、ちゅぱ……ちゅう」

微かに震える体でレキに覆いかぶさるティンク。

不器用な、歯と歯がぶつかる幼いキス。だが不思議と胸が切なくなるよう強い思いがティンクから伝わってくるのをレキは感じた。

「むむ……やるな……そういう初々しい雰囲気は、私にはとても無理だ」

幼い行為にふける少年少女、それを興味津々に観察するお姉さん。ロンドは酷くなる頭痛に頭を抑えながら、事が済むのを待つしか無かった。

そこに、

コンコン

「疾風騎士団隊長、ニースです。火急の用向きと聞き、急いで参りました」

「うむ、入れ」

更なる爆弾が投下されようとしていた。

1節（後書き）

こんばんわ、スタジオぽこたんです。
感想等お待ちしております。

それでは

2節

2

「レ、レキ……君!？」

扉を開けたニースが見たものは、床に押し倒されて妖精のように愛らしい少女から、熱烈な口付けを受けるレキの姿だった。

「ニ、ニースさん!？　こ、これは……違うんで　んちゅ、まっ

ちゅうっ」

ティンクを引き剥がし、言葉を放とうとしたレキの口に、今度は先ほどの軍人お姉さんが奪うようなキスをして来た。

「ふふ、隙ありだぞ少年。ここが戦場だとしたら、君は既に5回は死んでいるな。ちゅ、ちゅば……れるれる　」

ねっとりと舌を突き刺しながら、少年の口内をくすぐる女性。

そんな光景にニースは、

「い、いい加減にしてレオノーラ!　こ、これは何の冗談ですか!？」

顔を真っ赤にして怒鳴る。

「言葉は正しく使え疾風騎士団隊長。今の私は『イリーネ』だ」

「統合参謀本部議長にして統括作戦総長イリーネ!　私のレキを離して下さいっ!！」

「それは出来ない相談だニース」

「な、何故です!？」

「私はこの少年に惚れたんだ。ぞっこんラブといって良い。それが離したくない理由だ」

イリーネと名乗った女性は、これ見よがしにレキを抱きしめて見せた。

「っ!」

ニースは酷く動揺した後ずさりし、レキを一瞥して

「レ、レキ君の浮気者っ!」
逃げ出した。

戦乙女は自らの『戦場』から、初めて逃げ出した。
そんな部下を見たイリーネは、

「ここで踏み込んでこなくてどうする……」
小さくそう呟いた。

「そろそろ、離して貰えますか?」

不思議と沈黙を保っていた当事者であるレキは、イリーネに向か
ってそう言った。

「いや……だと言ったら?」

「女の人に暴力を振るうのは本意じゃない……かな」

その言葉は必要とあらば、容赦無くそうするという決意が籠めら
れていた。

「ふむ……どうにも本に書いてある通りにはいかないようだ」

イリーネは名残惜しそうにレキの体から身を離れた。

そんな彼女に、

「またつまらん恋愛本を読んでいたのか?」

ロンドが言った。

「何を言う。ただ読むだけで、少女から人妻、王女のような存在の
恋愛感を疑似体験出来るのだぞ? 最近読んだ『羊飼いの沈黙』で
は、先ほどのような男と女の奪い合いになった場合、高確率で『さ
んぴー』なる物に突入出来ると書いてあった」

「はあ……レキ殿。申し訳ありません我が愚妹が、ご迷惑をおかけ
しました」

ロンドは心底疲れたようなため息を吐く。

「な、何を言う。嫉妬は最高のスパイス」と言ったのは貴様だろう
!」

イリーネは少し拗ねた顔をした。

「それについてはもう俺が実行済みだ馬鹿」

「な!？」

「スパイスもかけ過ぎると、ただ辛いだけである。なんとも人騒がせな兄妹であった。」

レキは、のぼせたように顔を赤くして呆けたティンクを優しく床に座らせると、スツと立ち上がった。

「レキ……殿？」

先ほどから少年の様子がおかしい。ロンドは何となく嫌な予感を覚える。

「早く本題に」

レキは自らの不甲斐無さを攻めるような苛立った口調でそう言った。

ただそれだけなのに、ロンドは威圧されたかのような圧迫感を感じ、イリーネは興味深そうに目を輝かせた。

「それでは話を進めましょう。レキィザ・ダブルファング。牙の第二称号を持つ黒き双牙。黒狼騎士団団長閣下」

イリーネと呼ばれる女性は、礼節にのっとり丁寧にお辞儀をした。そして、

「我がイリスと、聖王国アーリントンとの協議の結果をお伝えします。まず、アーリントン第二王女ティンクィザ・フェアリーベルのイリス神学校への入学を認めます。並びに王女の護衛である黒狼騎士団団長レキィザ・ダブルファングに国内における騎士権限を与える事とする」

イリーネはそこで言葉を切ると、

「盟約に従い履行して下さい」

まるで呪文のようにそう言った。

対する少年。レキは、

「了解した。イリーネの名を受け継ぐ千里眼の魔女よ。今これより、この刻より、我が身は、我が軍団は、聖地イリスの預かりとする。

盟約に従い履行しよう」

レキはそこで言葉を切ると、

「そういう事だ お前達」

まるで呪いのようにそう言った。

次の瞬間、

聖地イリスは、およそ10万を越える大軍。漆黒の重甲冑に身を包んだ黒騎士の軍団に、完全に包囲制圧された。

誰も彼もが、彼らの侵入に気が付かなかった。

全ての警戒網が、目視と、霊視と、地脈と、魔術による四重結界が、破られもせず突破されていた。

彼らは、大剣を、大槍を、大槌を、大斧を持ち、イリスの要所要所に、突如、忽然と現れた。

そして建物の屋上、外壁、塔の上に、信じられないほど大きな大型弩砲。バリスタを装備した黒騎士達が、極大な矢、槍のような巨大な矢を番えて待機する。

更にこの部屋にも

身の丈二メートルをゆうに越える黒騎士が二体現れた。手には巨大なメイス、狼をかたどったフルフェイスの兜、そして扉のドアよりも大きな黒鉄のタワーシールド。

見るものを萎縮させ、恐怖させる。圧倒的な存在感がそこにはあった。

「な、なんのつもりだレキ殿！」

ロンドは恐怖を打ち払い、声を荒げた。

500年もの間、一度も落とされた事の無い聖地イリスが、首都アルビオレがたった一瞬でその喉元に刃を突きつけられていた。

だが、そんなロンドの心配をよそにレキは、

「それじゃ、首都防衛陣形7の3ね。後、君達怖いから隠密状態で

待機して」

「了解しております閣下。既にそのように……」

「うん、それと姫をここに置いていく。しばらくの間護衛を頼む」

「はっ」

見上げるような巨躯の黒騎士が、少年のような背丈のレキに頭を下げる光景は、巨人を従える少年の御伽話のように見えた。

だが紛れも無く、この少女のように可愛らしい少年が、彼らの黒騎士達の王なのだ。

「レキ殿！ お答え下さい！」

ロンドは再度レキを呼ぶ。

「備えあれば憂い無しって言うでしょ？ 心配しなくてもイリスに矛を向けたりしないって、その為の『制約』をかけてあるんだから、ですよねイリーネさん」

「盾騎士ロンド、憂う気持ちもわからんでは無いが、事は国家機密に相当する。いつも通りだ」

「……理解しろ、という事ですか。承知しましたよ統合参謀本部議長殿」

「よっ」

イリーネはそう言うと、レキを一瞥する。

「もう良いですよレキ殿、ニースを追ってやって下さい」

優しい表情になるイリーネに、レキは少し驚いた顔になる。

「恋愛とはどうにも教科書どおりにいかないようです。友を応援しようとして逆に傷つけてしまった。これでは『軍師』失格です」

イリーネは銀縁のメガネを外し、

「ニースの友として、ただのレオノーラという一人の女として、彼女をお願ひします」

礼節も何も無い。ただの丁寧なお辞儀をするイリーネ。

そんな彼女に、

「それじゃ、ボクの方からも少し知恵を貸してもらって良いかな？」

レキは困った顔で頬を掻いた。

「なんなりと」

「……す、好きな女の子に、ああいう現場を見られた場合。どうすれば良いと思う？ 実はさっきから考えてるんだけど、全然思い浮かばなくて」

それは、眼前の女性のせいで引き起こされた惨事であったが、事の原因となったのは間違いなく自分の、不甲斐無さと、優柔不断のせいだとレキは思っている。

なればこそ、自らの手で事を、関係の修復を、可及的速やかに（ASAP）実行する必要がある。

急いでニースを追いたい気持ち強いが、ここはまず作戦を立てるべきだとレキは判断した。

「私なら、その場で『さんぴー』なるものを持ちかけるぞ」

イリーネは、両手を腰に当て、自信満々の表情で言う。

「お前の意見は参考にならんから黙ってる」

「ぶ、ぶう……」

「レキ君、こういう場合。何が正解って答えは……おそらく無いと思う。女を怒らせた場合、男に出来るのはただただ誠意を見せる事だけなんだ。許してくれるかは 相手しだいだな」

ロンドは、何故か遠い目をして、ばつが悪そうに頭を掻く。

盾騎士の女性関係が、垣間見えた瞬間であった。

「誠意……ですか。わかりました」

レキは静かに頷く。

そして「うへへ、レキとキスしちゃったあ……」と今だ呆けているティンクを見ると、

「彼女をお願いします。黒騎士が守っているので身の危険は無いと思うけど、起きた時ボクが居ないと騒ぐと思うから」

加えてレキは黒騎士に対して、

「御守り陣形……えっと5番あたりで良いや、よろしくね」

そう言って部屋を飛び出して行く。

黒騎士はそんな主に敬礼すると、すぐさま 何処からとも無く上質の枕とシーツに毛布を取り出し、ティンクをソツと寝かしつける。更に、小さな団扇を取り出して、不快にならないようそよ風を送る。

なんともシユールな光景が広がっていた。

「……やれやれ、私は仕事に戻るよ。盾騎士ロンド、念の為、彼女の護衛をしろ」

「今日の私は非番なんだがな妹よ」

「緊急事態である。守護の騎士としての本懐を果たせ。聖盾騎士団隊長」

「了解……ボス」

ロンドは壁に飾られてる装飾盾を取り外すと、左手に装備し、扉の横の壁へともたれる。

「それで……お前は良いのか？ 本気なのだろう？」

「勿論。だが私は軍師だ」

イリーネはそれ以上何も言わず、書類に目線を落とす。

「そんな役回りだねえ……。もう一つ聞きたい事があるんだが良いかね？」

「機密事項は話せんぞ」

「ニースが、レキ君に惹かれてるといふ情報は、一体何処で得た？」

「昨日の今日だ。情報としてはあまりに早いだろう？」

「……昨日の今日では無いからな」

イリーネはペンを止め、そう呟いた。

「どういう」

「これ以上は乙女の機密に相当する。男は黙っている」

その言葉にロンドは、お手上げという風に両手を広げた。

3節

3

疾風騎士団、構成隊員のほぼ全てが女性で構成される戦乙女の集
団。

彼女たちは誇り高き騎士であり、女神イリスの巫女であり、高い
戦闘技術と神の奇跡を行使する強力な魔法戦士であった。

その名声はアーリントンの黒騎士に勝るとも劣らないもので、イ
リスの六騎士団でも最強の騎士団と呼ばれていた。

太陽は天高く登り、優しい日差しが降り注ぐ、午後の陽気。

疾風騎士団の詰め所からは、戦乙女達の勇ましい声が通りにまで
響いていた。

朝から続く厳しい訓練は、今もなお続いている。

「右、左、右、左！ ユリイ！ 軸がぶれています！ もっと鋭く
打ち込みなさい！」

厳しく声を出すのは、ツリ目が特徴的な、朽葉色の髪のポニーテ
ール騎士娘。名はフィリア。

肌の露出が極めて高い戦乙女の戦装束。伝説の魔導鎧『ブリュン
ヒルデ』を着るニースと違い、フィリアは極力肌の露出を抑えた女
騎士の格好をしていた。

「はい、副隊長！」

そう言っつて、まだ少女といえる年齢の騎士が、鋭い動作で剣を振
りぬく。

逆に、ニースに憧れる彼女達は、ニースとはまた違った一般騎士
向けの戦乙女の装束『ワルキューレ ver2.05』を愛着して
いる。

ニースほどではないにせよ、肌の露出が高く、スカートの丈は非

常に短い。しかし防御力の高さは折り紙つきであった。

「よし！ 次！」

副隊長と呼ばれたフィリアは、汗一つかかずに部下の訓練を続ける。

その時、

「副隊長。ニース様が戻られました」

一人の女騎士が報告に来た。

「む、早いですね？ わかりました。皆はそのまま続けなさい」

「「はいつ！」」

可憐で元気の良い戦乙女達の声に、フィリアは満足気に頷くと、鍛錬場を後にした。

「お帰りなさいませ、ニース様。それで統合参謀本部の火急の用とは ニース様？」

驚くべき事に、ニースの瞳には涙が浮かび、その顔色は蒼白だった。

「な、何かありましたか！？」

フィリアはそう尋ねながらも、ニースの体を素早くチェックする。女神のように整ったプロポーション。露出度が高く、扇情的にうつる衣装には、いささかの乱れは無い。男に乱暴された形跡は欠片も見受けられなかった。フィリアは、心中で安堵の息を吐く。

「少し部屋で休みます。緊急の時以外は……誰も通さないでください」

「は、はい……了解しました……」

釈然としないものを感じつつも、フィリアは上官の命令に素直に従う。

ただ、副官としての使命だけは果たさなければならぬ。

「統合参謀本部の用向きとは、一体なんだったのです？　もし私に出来ることでしたら、ニース様がお休みの間に」

そんなフィリアの言葉にニースは、

「いえ……ごく私的な用向きでした。貴女の手を煩わせるような事ではないわ」

その声は酷く落ち込んでおり、彼女が深く傷ついているのが判った。

美しく気高い『戦神ニース』の生まれ変わりと言われる上官に、一体何があったのだろう。フィリアは胸が締め付けられるような思いになる。

「な、何か、私に出来る事はありませんか？　誰かに話せば楽になる事もございます！」

するとニースは少し迷いを見せた後、

「では一つ尋ねます。Aという組織は、とても重要な攻撃目標への『奇襲』に失敗しました。その上Bという第三勢力の介入を受け、更にその第三勢力も、Cという別の組織からの奇襲を受けました」

「……三つ巴の戦況ですね……それで？」

「卑劣な罠により、肝心の攻撃目標は『人質』に取られてしまいました。ですが、Aには『目標』を救出出来る見込みがあったのに、それを見捨て、敵前逃亡を図りました。Aという組織への戦況評価を聞かせて貰えますか？」

「攻撃目標なのに、救出ですか？　酷く複雑な戦術シミュレートですね。ただ……Aという組織に限定して評価を下すのであれば

その組織は『素人』の集団かと思えます」

フィリアは、ぱつぱつと切り捨てた。

ニースの目には更に涙が浮かぶ。

「まず、奇襲に失敗した時点で作戦の見通しが甘いとしか言えませんが、奇襲とは成功すれば戦果は非常に高い作戦ですが、失敗した場合、部隊の全滅、または人質という最悪の事態を招きます。ですの

で『奇襲』とは必ず成功させなければなりません。しかもです。第二勢力の介入を許す情報収集の甘さが問題です。情報部は一体何をしていたのですか？信じられない失態です」

フィリアの酷評は更に続く。

「そして何より、仲間を見捨てて敵前逃亡を図る。これは騎士としてあるまじき行為です。およそ考えられる最低の行為です。もし生きて戻ったとしても彼らが待つのは軍規における絞首刑であるのは間違いありません」

「ふえ……」

フィリアは、自身が何かとんでもない。途轍もなく大きな地雷を踏んだ事に、今更ながら気がつく。

神のように強く、そして凜々しく、可憐で美しい、あのニース様が、まるで少女のように大粒の涙をこぼして泣いていた。

「ふええええええええん」

疾風騎士団の詰め所に、ニースの泣き声が響く。

動揺したのは、神と崇めるほどニースに心酔してるフィリアを含めた隊員達だ。

「う、うそ！？ニース様が泣いておられる！？」

「副隊長が泣かせたの！？」

「フィリア副隊長！何をしたんですか！？はっ！ま、まさか無理やり」

「ち、違う！私は何も！」

赤い顔でそう言った隊員に、フィリアも頬を赤くして答える。

「ぐすん、ぐすん、レキ君が……レキ君があ……ふえええええん」

「レキ……君。誰のことでしょう？」

「殿方の名前に聞こえますが……」

「上級騎士団の面々に、そのような名の人物はおりません」

「これは……痴情のもつれですね」

一人の戦乙女がそう言った。それはユリイと呼ばれた少女だった。その瞬間、

「……私達のお姉様に……」

「ニース様を傷物に……」

「きつと純真無垢なニース様を騙し、エッチなお体を……好き勝手に弄んだのよ！」

「許せない……」

「レキ……と言ったわね……」

疾風騎士団に、イリス最強と言われる戦乙女達に、不穏な空気が流れる。

「誰か！ ニース様をお部屋へ。万が一にも間違いがあつてはいけない。ツーマンセルでニース様をお守りしろ」

フィリアは副官としての使命を果たすべく、部下に命じる。

ベテランの上級騎士二名が名乗りをあげ、彼女らに大切な上官を預ける。

「最低限の部隊を残し、手すきの者は全員大会議室へ集結しろ！ 事態は緊急を要する！」

「「はいっ！」」

大会議室に集結した乙女達の軍勢。その数およそ180名あまり。

「どうやら、一個中隊規模が集まりましたか」

「現在、非番の者、予備役の者にも連絡をとっております。それと外で活動中の三個中隊から、すぐに戻るとの連絡がありました」

「いえ、増援は必要ありません。この部隊だけでやります。事はデリケートな問題です。それに通常任務に支障を来たすなぞ論外です。私達に求められるのは、秘密裏に、そして迅速に行動可能な少数精

鋭部隊。対ゲリラ戦略を思い出しなさい！ 可及的速やかに事にあたります！」

「はいっ！」

「では部隊を三つに分けます。第一小隊は偽装と隠蔽を、第二小隊は秘密戦術偵察を、残る第三小隊は実動部隊です。私が指揮を取ります。『レキ』なる目標を見つけ次第、即時交戦に入ります。殺してはなりません。生きて捕らえます。ですが……手足の一、二本は許容範囲でしょう。日頃の訓練の成果を見せなさい！」

フィリアは冷たい笑みを浮かべ。

敬愛する『お姉様』を泣かせた不逞の輩への復讐に燃える戦乙女達は、今だ見ぬ怨敵に静かに闘志を燃やした。

そこに、

「た、ただ、大変です!!!」

一人の戦乙女が血相を変えて会議室に飛び込んできた。

「単純明快に報告しなさい！」

「も、目標、発見しました！」

その報告に会議室は騒然となる。

「場所は!？」

フィリアは勤めて冷静にそう尋ねる。

だが、報告に来た戦乙女は、顔を蒼白にして、

「現在 我らが疾風騎士団詰め所、その玄関です！ 申し訳ありません！ 目標の本拠地への侵入を許しました！」

「な、なんですって!？」

フィリアは驚きのあまり椅子から立ち上がる。倒れた椅子の音が、水を打ったように静かになった会議室に嫌に響いた。

3節（後書き）

次回、怒りに燃える戦乙女達を相手に、レキが取る行動は！？
作者はついに解禁します。

うら若き乙女には、きっと刺激が強い展開になるでしょう。

それと質問です。

現在、縦読み小説と同じ感じで、必要以上に行間にスペースを入れない書式で書いています。

横読みのネット小説としては、読みにくいかもしれません。

そこの所どうでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8324x/>

わんわんお！

2011年10月30日02時12分発行